ポケットモンスター　Trans Monsters

イビルジョーカー

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ポケットモンスター…縮めて『ポケモン』。そう呼ばれる彼等は人間にはない様々な不思議な能力を持ち、昔も今も人間と共に繋がりを築き歩んで来た。

そんな世界に『彼等』はやって来た。

人間でも、ポケモンでもない金属の身体を有した種族『トランスフォーマー』。

これは…ポケモンと行動を共にし生きる『ポケモントレーナー』の卵たちとポケモン。そして、トランスフォーマーの三つが織り成す一つの冒険譚。

※　本作はポケモンとトランスフォーマーのクロスオーバー作品です。以前投稿した

ポケットモンスター　ＴＲＡＮＳ　ＧＥＮＥＲＡＴＩＯＮの改稿版となります。

※ｐｉｘｉｖに第１話を更新しました。

目次

〜〜出会いの章〜〜

第1話　始まり　カントー編　part1 ―― 1
第2話　始まり　カントー編　part2 ―― 10
第3話　始まり　カントー編　part3 ―― 20
第4話　始まり　カントー編　part4 ―― 35
第5話　始まり　カントー編　part5 ―― 42
第6話　始まり　カントー編　part6 ―― 48

～～出会いの章～～

第1話　始まり　カントー編　ｐａｒｔ１

遠い遠い宇宙。
地球から途方も無く離れた場所に全てが金属で構成された惑星『サイバトロン』があった。その支配者として高度な文明を構築し君臨していたのは、サイバトロンで誕生した知的金属生命体『トランスフォーマー』だ。
彼等には二つの種が存在した。
気性の荒い攻撃的な原生金属生命を祖先とする『プレダコン』。
温和な性格で、他の生命にも愛情を注ぐ習性を有した原生金属生命を祖先に持つ『マクシマルズ』。
この二つの種族は原生金属生命時代から相争ってきた。
マクシマルズは、自分達の優れた能力をサイバトロンとこの宇宙に生きる全ての生命の為に、と言う思想と信念を掲げて来た。
プレダコンは闘争に美を見出し、他の生命を戦いによって奪い、あらゆるものを破壊する事を信条として掲げていた。
故に両者は戦った。
戦って、戦って、戦い抜き。
一つの戦いが終わればまた戦いが始まる。
一時の平和があったとしても、次々と戦いの風が吹き、炎が舞った。

それが数百万年と続けば嫌気が差し、サイバトロンを去る者も続出した。しかしそれでも戦いが終わる事はなかった。
やがて時代が移り変わり、マクシマルズはサイバトロンと全宇宙を守護する『オートボット』を組織。一方これまでその闘争気質から調和というものを理解できず、仲間内でも争いを頻繁に行っていたプレダコンに1人のリーダーが現れた。

本人は自らの名をこう呼んだ。
『破壊大帝メガトロン』と。
そして、メガトロンは強かった。
瞬く間にプレダコンを纏め上げ、自分を筆頭に置いた勢力『ディセプティコン』を組織した。メガトロンはその狡猾な知恵と規格外な肉体的パワーを用いてオートボットのリーダー『センチネル・プライマル』を打ち倒し、その命を奪った。
偉大なる統率者を失ったオートボットは弱体化し、戦いは大きくディセプティコンへと傾き出した。
しかしこのままディセプティコン側に勝利が決する事はなかった。
オートボットのリーダーの称号『プライマル』を受け継ぐ新たな英雄『オプティマス・プライマル』が誕生がしたからだ。
今も戦いは続いている……そしてこれからも……。

『地球・マサラタウン　現在時刻：午後９時０２分』

この青く自然に恵まれた惑星『ガイアス』には、通常の生物とは異なった生命体が存在する。
『ポケットモンスター』。
縮めてポケモンと称される彼等はガイアスのありとあらゆる場所や環境に生息している。そして人間の言葉を解することのできる知能と様々な特殊能力を併せ持ち、ガイアスの知的生命体『人類』と共に生きて繁栄を育んで来た。
特にポケモンと密接に関わって来たのが『ポケモントレーナー』と称される者たちだ。
生まれた場所や人種を問わず、トレーナーは誰でもなれる。最低条件としては『ポケモンを理解し、いかに共に歩むか』になるのだが、中にはポケモンを犯罪の道具や悪徳商売の商品としか見なさない最悪

なトレーナーもいる。
だが、善良なトレーナーは自身のポケモンを信じ、共に磨き合いながら生きている。
その最たるものこそ『ポケモンバトル』だ。
人間の戦略に基づく的確な指示と、それに応えるポケモンの多種多様な戦闘能力。
これら二つがあってバトルは成立することができる。まさに人間とポケモンの信頼関係が試されるものと言っても過言ではない。そんなポケモンバトルに魅了され、立派なポケモントレーナーになろうと目指す少年がいた。
「やばい！　完全に遅刻した～ッ!!」
レッド・フレイム。それがカントー地方の田舎町『マサラタウン』に住む１０歳の少年の名だ。
赤い帽子を頭に被り、黄色の『Ｐ』の文字がプリントされた黒のＴシャツに袖白の赤いジャケット。白いラインが左右側面に二本ある青いズボンという格好のレッドは必死に『ある場所』へと目指し疾走していた。
未だポケモンを持たず、正式なトーレナーとは言えない彼はこの町にポケモン専門の研究所を構える『オーキド博士』の下、３人の幼馴染と共にポケモントレーナーになる為の勉学に日々勤しんでいた。
しかし今日は運悪く寝坊してしまい、それが今こうして必死に走っている理由というわけだ。
だがそれでも、かなりの遅刻を食い、ようやっとの思いで研究所へ辿り着いた所だった。
「遅いっ！　まったくもって遅いぞ！」
研究所のドアを勢い良く開け、中へ入った直後。セキトの耳を貫いたのは響き渡る初老の男性の一喝だった。この『オーキド研究所』で所長を務め、更には『ポケモン研究の権威』としての功績を誇る『オーキド博士』。
彼の研究者とは思えぬ武人の如き鋭い視線は、遅刻をしでかしたセキトへと向けられていた。

「レッドや。お前さんがポケモントレーナーになる為、色々と努力しているのは重々承知だ。しかし、し・か・し・だぞ？　だからと言って何回、何十回も遅刻しても良いという免罪符にはならん！」
「うるせークソジジイィィ！　こちとら早起きは苦手なんだよ！」
「ジジイとは何て言い草文句だ！　失礼にも程があるわい!!」
　年甲斐もなく売り言葉を買うポケモン学会の権威と、１０歳とは思えないヤンキーのような口の悪さでメンチを切る少年。両者は一歩も引かず、あー言えばこー言う。そー言えばどうのこうのと。
　口喧嘩はヒートアップするだけで、果てがまったく見えない始末だった。
「あーもう、そこまで！　いい加減にしろ２人とも！」
　そんな彼等に仲裁の言葉を投げ掛けるのは、１人の少年。
　紫の葉の形がプリントされた、緑色の生地で作られた半袖のＴシャツにベージュ色の長ズボンの容姿の彼の名は『グリーン・グラス』。先ほど述べたセキトの３人の幼馴染の１人だ。
　ちなみにオーキド博士の本名は『オーキド・グラス』。
　名字から分かる通り、グリーンとオーキド博士はれっきとした孫と祖父という血縁者同士の間柄である。
「グリーンの言う通りですよ。今日は私達にとって、『最初のポケモン』と『図鑑』をもらう大事な日なんですから。２人とも今日くらいはいつもの喧嘩なんて止めて下さい！」
　グリーンの言葉に便上する形で博士とセキトに注意を促す一人の少女。黒地のノースリーブなワンピースを着用し、下はピンクのスカート。髪はおかっぱ風のショートヘアというヘアスタイルで整えられ、その青い瞳の両目には同じく青い色に染まったフレームの眼鏡がかけられており、おしとやかで知的な趣を感じさせる容姿をしたこの少女の名前は『ブルー・アクア』。
　彼女こそ、リクハと同じくセキトの幼馴染の内の１人であり、レッドたちと共にポケモントレーナーになるべくオーキド博士の教えを受けているのだ。
「なんでこうも喧嘩するのかね～。喧嘩するほど仲が良いとはよく言

うけど～」
　などと、語尾を伸ばすようにして暢気口調で答えるのはセキトの幼馴染にして最後の三人目『イエロー・エレクトリシティ』。
　黄色の短い髪に黄色の半袖Tシャツ。下は黒の半ズボンを履いており、他の皆と比べるとラフな格好をしている少年だ。
「誰がこんなアホジジイと仲が良いんだよ、コラ」
「ん、んん！　確かにこれ以上は先に進まんな。すまんのう」
　レッドはイエローの言葉に苦虫を噛み潰したような表情で嫌々とそう言い、オーキド博士はセキトのアホジジイ発言をスルーして大きく。そして実にわざとらしい咳払いを零し、本題に入ろうとした。
「さて、何はともあれ！　これで全員が揃ってくれたわけじゃが、今日がどういった日なのか……無論分かっておろうな？」
「「はい！」」
「もっちろん～♪」
「おう！」
　ブルーとグリーンは礼儀正しく『はい』と答え、イエローは相変わらず暢気を含んだ語尾伸ばしで。レッドは喝と言わんばかりに気合いを含んだ声で答える。
　全員が理解していることを改めて知ったオーキド博士は満足気に頷き、後ろを振り向く。そこには金属の円柱状の台座があり、丸いガラスケースには四つのポケモンを捕獲する為に使用する紅白色のボール…通称『モンスターボール』が置かれていた。
「この中には『始まりの3匹』ともう一匹あるポケモンが入っておる。どちらを選ぶにしても、初心者向けのポケモンだから心配は無用じゃ」
「始まりの3匹……トレーナー初心者が一番最初に貰うポケモンのことですよね？　地方によって異なりますけど、ここカントーだと確かフシギダネ、ヒトカゲ、ゼニガメの筈です」
「うむ！　その通りじゃよブルー。そしてその三匹ともう一匹…四匹目は『ピカチュウ』だ」
「「「ピカチュウ？」」」

疑問を含んだ声が同時にハモる。そんな４人の疑問に答える為、オーキド博士は四つのボールを抱え一気に放り投げる。すると自動的にモンスターボールが開かれ、中から眩い光が溢れ出す。
さながら、その光は生き物のような流体運動を見せ、床へと着地。そこから段々と何らかに形成していく。やがてそれが一つのシルエットとして完成された瞬間。
眩い光は消え去り、代わりに４匹のポケモンが顕現を果たした。
青みがかった薄緑の体色をし、その背に大きな深緑色の蕾を有する両生類のような姿のポケモン『フシギダネ』。
赤い体色に腹部と尻尾の裏側が薄い橙色に染まり、尻尾の先に小さな火を宿したトカゲのようなポケモン『ヒトカゲ』。
水色の体色に背の部位が赤い甲羅を持った亀に似たポケモン『ゼニガメ』。
そして最後の四匹目……黄色い毛並みに鋭く長い耳。両頬に赤い丸の形をした電気袋の器官を持ち、背に茶色い二本線と先が黒いギザギザの尻尾が特徴的な愛嬌に溢れるポケモン『ピカチュウ』。
「こ、これが……」
「ピカチュウ…?!」
「と、始まりの３匹ですよ！」
「すごい……資料で見たことはあるけどさ、やっぱ実物は違うよ…」
感嘆の一言に尽きるリアクションに満足そうに頷くオーキド博士。
そんな博士を尻目に４匹のポケモンを前に思う存分に触れ合っていく４人の顔は、活き活きと面白味・好奇心が溢れ出たかのようで実に楽しそうなものだった。
実際の『最初の三匹』とピカチュウを見て触るのは今回が初めてだからだ。それまでは映像や写真などの資料でしか見たことのなかったポケモンたちが今、自分達の目の前に確かにいる。
なればこそ、興味津々なのは仕方の無い事である。
対する４匹はと言うと、性格はそれぞれ違うが凶暴という性質は皆無な為、普通に撫でられようと嫌がる素振りは見せずむしろ喜んでいる感じだ。

そんな中で４匹の内の１匹であるピカチュウは、ヒトカゲの尻尾に興味津々なレッドをじっと見つめていた。周りはそのことに気付く事はなかったが、レッドを見るピカチュウの目は、不思議と長年探して来たものをようやく見つけたかのような……何故かそんな雰囲気を醸し出していた。

何処かは定かではない雲の上の天空。

そこでは一匹のリザードンが明確な姿が見えない『敵』と戦っていた。

姿は見えず、ただ輪郭だけが浮かび上がる何かは火炎を吐くリザードンへ向けて電気のようなエネルギーを放射。当てればただでは済まないほどの威力を秘めたそのエネルギーを前にリザードンは怖気づく様子は一切無い。

その瞳にあるのは、揺るがぬ意志の篭った『使命』と言う名の灯し火だ。

自らが課した使命によって確固たる決意がリザードンの闘心を燃え上がらせる劫火と化し、それがまるで実体として顕現したかのように口から更に強力な火炎を吐き出してエネルギーを見事相殺させてしまう。

先程から繰り出しているこの攻撃は『かえんほうしゃ』。主に炎タイプのポケモンが覚える技の一つだ。

≪さすがだな。やはり『プライマル』直属の精鋭部隊の一員だけあって、そこいらの『オートボット』とは格が違う≫

拡声器のようなものを使っているのか、リザードンが相対する正体不明の何かから響くようなボイスエフェクトが掛けられた男の声が『敵』の方から聞こえて来た。

それは今しがた相手取っているリザードンへの賛辞らしきものだが、しかしその言葉の中に『プライマル』や『オートボット』。果ては

『直属の精鋭部隊』など。知らない者にとってはその意味を解することのできない単語が幾つか混じっていた。
傍から聞けば疑問しか浮かんでこないものなのだが、生憎とこのリザードンは『その単語の意味を知る者』。
故に『彼』は何かに対し言葉を紡いだ。
「お前なんぞに褒められても、正直嬉しくないな。虫唾が走る」
それは紛れもなく彼……リザードンが発した明確な意思ある言葉だった。
断っておくがリザードンを含める『ポケモン』というカテゴリーに属する生命体は、一部例外を除いては人間の言葉をその口で発する事は出来ない。ただ理解するだけだ。
だからこそ、ポケモントレーナーの指示を的確に実行する事ができる。
しかしこのリザードンは確かに言った。テレパシーの類ではなくはっきりとした肉声で。
ポケモンが人間の言葉を話すという、この異常性を驚愕し追求する者は残念ながらこの場にはいない。あるのは、リザードンと敵の両者それぞれに存在する明確な敵意だけだ。
≪他に仲間がいるのか？　答えたくなければ答えなくていい。その頭から直接記憶データを残さず吸い尽くしてやるだけのことだ≫
「お前たちの好きにはさせない！」
男の声を掻き消してしまうほどのリザードン本来の鳴声で吼えながら、そう答える彼は何かへ向けて『ねっぷう』を放つ。
高熱を伴った風は金属が歪んで変形していくような音を立てて、何かに確実なダメージを与えた。
≪やってくれるな。だが、これは耐久性こそ低いが、その分『武装の方』は充実しているのが売りだ≫
自信に満ちた男の声と共に何かから赤く輝く光弾が発射される。それは小規模な爆発と共に瞬時にネットのようなものへと変化させてリザードンへ絡み付いた。
「ぐっ！　このォォ……」

何とかもがいて脱出を試みるが、そうすればそうするだけ光のネットはより強く絡む。しかも、ネットのエネルギーが少々ながらリザードンに確実なダメージを与えていた。
≪今だ！　レーザー砲、発射ァ！≫
完全に飛行不可能というわけではないが、それでもネットのせいで飛行の機動性が落ちてしまったリザードンはもはや的でしかない。
男の合図と共に何かから放たれる一筋の閃光。それは無残にもリザードンの急所へと命中してしまった！
「■■■■■■■■ーーーーーーーーーーーーーーーーッッッッッ!!!!!」
竜の咆哮。
まさしくそう表現するに相応しい断末魔を上げ、意識も力も消失と化してそのまま雲の下の地表へと落下していくリザードンの様子を確認した『敵』は、すぐさま落ちていったリザードンを追おうと試みる。だが、先程技を受けたダメージが仇となり追跡は困難。
その証拠に頭上モニターには『船体ダメージ危険領域・早急な修理を求む』と、けたたましいアラート音を鳴り響かせながら表示されていた。
「チッ、船体ダメージが予想以上に酷い……追跡は無理だな」
何か…の中に潜む『1人の男』は忌々しそうに顔を曇らせる。今までリザードンと戦っていた『敵』とは『船体』……すなわち、一隻の小型戦艦なのだ。その制御室には数名の『R』のイニシャルが描かれた黒い制服を身に纏った人員がおり、中央にはあのリザードンと会話を交わしていた男がいた。
「だが、いい。既に奴の識別反応は記録した。ヤツが生きていたとして、何らかのアクションを起こせば容易に見つけられる……」
そう言って、男は笑みを浮べた。他者から見れば背筋に悪寒が奔るほどの邪悪な微笑を……。

第2話　始まり　カントー編　ｐａｒｔ2

ポケモンフィールドワーク調査実施試験。通称『ポケワーク試験』。
オーキド博士直々に考案した試験的企画で、早い話がポケモントレーナーとして正式に成る為の簡単なテストだ。
決められた一定区域内に生息するポケモンを最低1匹（二匹以上でも可）は調査し、それを元に簡単なレポートを作成する。そして実際に自分が選んだポケモンを使い、一匹限定で野生ポケモンをゲットする……というものだが、ただ野生のポケモンをゲットするだけでなく『ポケモンの生態調査』という工程も必須課目となる。
その為にレポート用のノートが各自配られており、カメラを取り付けたオーキド博士の手持ちポケモンたちが身を隠しつつ、試験者たちの監視に当たっているので不正を働こうとしても無駄だ。
そして今回。その試験を受ける4人は、自分が見て、よく考えて選んだポケモンと共に試験の場となるマサラタウンにある『試しの森』の前へと集結していた。
「オーキド博士、まだかな～」
「カゲカゲ～……」
片手で日差し避けをしつつ、目を凝らして遠くへと視線を見据えるイエロー。
その傍らには彼が選んだパートナーであるポケモン『ヒトカゲ』が同意するように鳴声を発していた。
「まぁ、いつものことだ。どうせ支度とか諸々に手間取ってるんだろ」
グリーンは呆れながらもそう言い、その隣には暇潰しとばかりにその辺の野花を眺めているフシギダネがいた。このフシギダネはグリーンが選んだパートナーである。くさタイプのポケモンが特に好きという、自身の嗜好性から選んだ面もあるが性格的な相性も良く、何よりリヒトカゲ、ゼニガメ、ピカチュウと比べてもバトルにおける技や戦法のテクニックセンスは抜きん出ている。

技巧派であるグリーンにしてみれば、これ以上ない相性の良いパートナーポケモンだ。
「そうですね。いつものことですから、気長に待ちましょう」
「ゼニ〜！」
オーキド博士に対するリクハの見解に肯定の意を認めつつ、気長に待とうとするナミに彼女のパートナーであるゼニガメも同意だ、と言わんばかりに鳴声を上げる。
ブルーはみずタイプのポケモンに好かれやすく、自身もまた大好きだ。最初のポケモンがゼニガメとなったのは必然だったのかもしれない。
「んなこと言ってもよぉ。あんのクソジジイ、何時来るか分かんないんだぜ？　先に始めた方が良くないか？」
「ピ〜カ……」
そう言うのは、ピカチュウを相棒として選んだレッドだ。
そんな彼に肩に乗っていたピカチュウはまるで『まぁまぁ、待ってあげようよ』と言いたげにレッドの頭を側面から手でポンポンと叩く。レッドがピカチュウを選んだ理由は単純的に『珍しかった』ことと、『ピカチュウが彼自身に特に懐いていた』という位のもので、特に深い理由などない。
しかしその点で言えばナミと同じ『ポケモンに好かれやすい性質』を有するのかもしれない。トレーナーとして、ポケモンに好かれるというのは当然のことであり、大切な要素の一つだ。
もっとも、それを無意味と断じるようなトレーナーもいるにはいるが、そこはもう人それぞれの価値観の問題になってしまうので論じ合ったところで不毛な平行線を辿るだけだろう。
「お〜い、すまんお前達〜〜!!　色々と準備とか諸々に手こずってしまったわい！」
やっと来たオーキド博士に一同は呆れつつ、セキトに至っては若干苛立ちを覚えてはいるが敢えてそれをぐっと心中にしまい込む。
ただでさえ無意味に時間を潰したのにまた自分とオーキド博士の口喧嘩で時間を潰すような真似はしたくない。自分が嫌だと言うよ

り、3人に迷惑をかけるのは嫌だと言う、似合わず可愛らしい理由からなのだが…本人は否定するだろう。
彼からしてみれば恥ずかしい事この上ないからだ。
「うむうむ。さすがじゃな。全員集まっておるな」
「じゃあ、開始しても良いか爺ちゃん」
グリーンの問いにオーキド博士はグッジョブと親指を立てて、OKサインを出して頷いた。
「いいとも。では、これよりポケモンフィールドワーク調査実施試験、略して『ポケワーク試験』を始める！」
オーキド博士の始めの掛け声を合図にレッド、グリーン、ブルー、イエローの4人はポケモントレーナーになる為、その第一歩を踏み出し『試しの森』へと臆せず駆け足で入っていく。その様子を4人の姿が見えなくなるまで見据えていたオーキド博士の顔は少々不安を見せつつ、同時に嬉しそうだった。
おそらく、何の問題もなく4人全員が合格するだろうと。オーキド博士はそう見越していた。
4人の成績は悪くなく、特にグリーンとブルーは非常に高い。
イエローは、正直バトルにおいてはそんなに得意な方ではないが、しかしポケモンに対する探究心は強くきんとした知識もスポンジの如く吸収して覚え込んでいる。本人にその気があれば、ポケモン博士も夢ではないだろう。
レッドはもう少しあのヤンキーもしくはチンピラのような態度さえ直してくれれば言う事なしであろうが、あまり期待はできない。
だがポケモンが大好きなことは事実だ。自分よりもポケモンや仲間の事を一番に考え思いやれるレッドは4人の中では一番ポケモントレーナーとして向いているとオーキド博士は考えていた。
教え子1人に贔屓するようで、教育者として本人はあまり良い気はしていないのだが……そう思ってしまうのだから仕方がない。
ともかく。今はこの試験が何事も問題なく、滞りなく進行する事を祈って待つしかない。
オーキド博士は、自身の手持ちポケモンに取り付けたカメラから送

られる映像をテレビのリモコンのような形状をした携帯端末の画面で、しっかり４人の様子を確認しながら待機するのみだった。

カントー地方のとある山奥。
そこには一部分だけ開けた場所があり、広さは学校の体育館一個分はある。
そんな場所を臨時拠点としている者たちがいた……。
「ケッ、この星の酒は質が悪いな。まぁ飲めなくはねーけどよ」
「そーいうなって、『ロングハウル』。ここと サイバトロンは違うんスよ」
シリアスの欠片もなく他愛ない会話を繰り広げている者たちが約二名いた。彼らに対し『人間なのか？』と問いかけたとして、返って来る答えは十中八九『違う』、の一言だろう。
何せその二名はれっきとしたポケモン。
一匹の『ガラガラ』と、一匹の『サイホーン』なのだから。
両者は紛れもなくポケモンの筈なのだが……しかしれっきとした人間の言葉を流暢に紡いでいた。
「けどなぁ、『ボーンクラッシャー』よぉ。ちっとは上級な酒があってもいいだろうが」
一匹のオスのサイホーン…いや『ロングハウル』は不機嫌気味にそんな事を述べ立てる。
しかも吐き出される息からは酒のそれとまったく同じ臭いが含まれており、心なしか顔が若干赤みを帯びている。そしてもう一匹のポケモンであるガラガラ…『ボーンクラッシャー』はそんなロングハウルの様子を見て、疲れたような溜息しか出て来なかった。
今のロングハウルの状態を分かりやすく俗な言葉でいえば、やはり『酔っ払い』としか言い様がないだろう。
別段、彼が酔っ払い状態になることなど決して珍しい事でもなけれ

ば、滅多にない稀な件でもない。至って普段通りと断じても過言ではない。しかし、このサイホーンが大好物の酒を何が何でも手に入れようとする時は、決まって力任せな手段方法で手に入れるのがテンプレートな方程式である。

故に、普通に鑑みてこうして酒に酔った状態に陥っているのは何処からか掻っ攫って来た酒類をガバのみした結果、というわけである。だがボーンクラッシャーとしてはそれを咎める気は１ｍｍ僅かでも存在しない。

自分やロングハウル、そして他の仲間たちが属している組織軍『ディセプティコン』はそういった類の存在だからだ。他者からの略奪を基本中の基本とし、目的の為ならばあらゆるものの破壊を実行する……ある意味『悪の軍勢』と称されても仕方が無い。

そんな組織に属し、自分も平然とやっている略奪行為をどうして非難できる？　そんな資格は端から存在しないのだ。

ボーンクラッシャーが物申したい事は略奪行為そのものではなく、『派手に暴れるな』と言いたいのである。

他者から何かを奪うのはいい。奪うというのは自分達が平然とやる…謂わば人間で言う所の『息を吸う』のと同じ程度に当然な事なのだ。だが自分達には、そのバックに『上』がいる。

荒くれ者で自分勝手な連中をディセプティコンという一つの輪に収めてコントロールでき、その肉体的な力は恐ろしく強く生半可な攻撃は掠り傷一つさえ負わす事叶わず、その秀でた頭脳から導き出される策謀もまた然り。

そのような『絶対強者』という言葉が相応しい存在に『派手に事を起こすな。計画に支障が出る』と、深く深く釘を刺されている。

なればこそ、この人間やポケモンが蔓延る世界での本能に任せた目的も意味も無い行動は控えるべきだろう。

しかしボーンクラッシャーやロングハウルが属するディセプティコンの面々というのは、大概において些細なきっかけで暴走してもおかしくはないイカレ共ばかりだ。

無論、例に漏れずロングハウルもその一員であり、ボーンクラッ

シャーも該当こそするが比較的マシな部類に入る…とは言え、あくまで平常時においてだが。
ともかく。このまま酒を求めて行動がエスカレートし、より過激性を増す前にロングハウルを止める必要があった。
「少しは強奪を控えろよ、ロングハウル。俺たちのボスが直々に言ったんスよ？　『派手な行動はするな』って。となりゃあ～逆らうなんて愚の骨頂もいい無駄骨ッス。お分かりよろしい？」
「そ、そんなこと、わ分かってるさ！　控えればいいんだろ。控えるよ！」
若干ビビリながらロングハウルはそう答えた。
ボーンクラッシャーもそうだが、彼もまた『あのお方』が怖いのだ。実際ヘマしてしまった時などの威圧感は生半可なものではなく、物理的な重量感さえ伴っていると錯覚せしめるほどだ。
そんな尋常ならざる相手に対し、逆らって命を落し無駄にするほどロングハウルは大馬鹿ではない。命が惜しいものは惜しいのだ。
「お～い、お前等！　我等が『ビルドストラク師団』の輸送兵に先攻破壊兵よォォッ!!　同じくビルドストラク師団にしてそのリーダー、『スクラッパー』様が帰って来たぜ～！」
ふと、そんな声が2人の聴覚センサーに届いた。
誰がどう聞いても男の物だと分かる低い声。その声のした方向へと2人が視線を向けると、その先にはいくつもの石が固まって丸い形となったような身体を持ち、更に爬虫類に似た顔と三本指の両腕、両足を生やしたポケモン『ゴローニャ』がいた。どうやらあの声はゴローニャから出ていたらしい。
しかも、よく見ればそのゴローニャを先頭に後から何匹かのポケモンが付いて来ていた。
頭に一本の角を有し、角を含めた全身が余すことなく岩で構成された蛇のような姿と巨体さを持つ『いわへびポケモンのイワーク』。
全体的な形状は亜人型。イメージで例えるなら袴を履いた和風の女の子のような雰囲気を想起させるかのように醸し出し、ポニーテールそっくりな部位が身体とほぼ同格の大きさの口部器官となってい

る『あざむきポケモンのクチート』。
赤く少し平らめで所々にフジツボのような穴だらけの丸い甲羅から、ひょろ長い頭首と手足となる触手を出した亀（？）に似た外見の『はっこうポケモンのツボツボ』
。
先頭のゴローニャを含めれば計４匹のポケモンたちがボーンクラッシャーとロングハウルの下へと近付いて来る。
「やっと戻ったか。で？　例の品は手に入れたのかよ」
「ああ、勿論だとも」
ぶっきらぼうに苛立ちを交えたような口調で彼等へ向け、開口一番に話しかけたロングハウルだがすこぶる機嫌が悪いようだ。
理由としては『彼等の帰還が予定より少々遅かった事』と『なかなか口旨い酒を飲めなかった』という割と些細でしかなかった。
しかしいかに理由がどうあれ、会話する上での礼儀が成っていないのは誰がどう見ても分かる。
一方、ロングハウルの態度にゴローニャ……『スクラッパー』を含め、他のポケモンたちは特に思う所はなくスルーした。いつものことだからだ。
「ほれ、これが『ジムバッジ』だ」
スクラッパーが懐からゴソゴソと手を動かしてロングハウルの言う『例の品』を取り出し、それを手の平の上で見せた。
「これが、カントーに８つあるジムバッジの内の２つ……『グレーバッジ』に『ブルーバッジ』だ」
ジムバッジ。
それは数多いるポケモントレーナーの中でも上位に位置する強さを有した『ジムリーダー』が保有するバッジの事である。
ジムリーダーは各地方ごとに８人以上が存在し、カントー地方の場合は８人。彼等は自分へと挑戦した者が自分を打ち倒して見せた時、その証としてジムバッジを挑戦者へと授与するのだ。
今回スクラッパーが入手したジムバッジは『ニビジム』のジムリーダー『タケシ』が所有する八角形の石を象った『グレーバッジ』。

『ハナダジム』のジムリーダー『カスミ』が所有する水の雫を象った『ブルーバッジ』の計2個となる。
しかも特筆すべき事にこれ等は『自分に勝利したトレーナー用』のものではなく、自分達以外の誰にもその存在を漏らしてはならないと、8人のジムリーダー間で堅く定められた掟に基づいて『封印してあったモノ』なのだ。
「って、おいおい。一週間も時間かけてたったの二つだけかよ」
やたらと自信満々に見せ付けて来るスクラッパーに対しロングハウルは全部ではなく、あくまで二つだけという戦果に不満を漏らすだが、とうのスクラッパーはやれやれと溜息をつく。
「あのなぁ、ロングハウル。この星の知的生命体ども…確か人間っつったか？　奴等は存外侮れん。確かに技術力や個々の戦闘能力に関しては全然下等で脆弱だがな…それをポケモンという生命体の力で補ってる。
いいか？　ある意味ポケモンと人間は一心同体と言ってもいい。知の部分を人間が担当し指示し、力の部分をポケモンが担当して実行する。あの連携プレイは……今後において俺たちディセプティコンの脅威に成りかねないぞ」
スクラッパーの言葉に冗談や悪戯という感情は存在しない。あるのは、ただ冷静で正確な観察眼によって導き出された事実だ。
ロングハウルは懐疑的な表情でスクラッパーを見るが、しかし事実なのだと認めるしかない。ディセプティコンの部隊の一つ、『ビルドストラク師団』が正式に結成されてから大分経つ。結成前もこの6匹兄弟のように一緒だった故にその付き合いに関して言えば決して伊達ではない。
だからこそ、スクラッパーがどういった人物なのかよく分かっている。
謙虚で真面目…且つ、この中で分析力に長け、適切な指示を下せる自分達の唯一のリーダー。そんな彼がつまらん気持ちで冗談を言うことは決してない。プライベートならば必ずしもと言うわけでないが……今は仕事として活動を行使しているのだ。

そのような状況下において、他愛も無い戯言を述べ立てたりしない事をロングハウルは重々承知しており、とりあえずは納得する事にした。
「つーか、これに一体どんな価値があるッスか？」
ここでボーンクラッシャーが質問して見た。
いかにトレーナーにとって大変な価値のあるバッジでも、彼らにとっては無価値なガラクタにしか見えない。本当に何も無ければ…の話だが。
「分からないか？　なら感知センサーを倍に上げて、集中して見てみるんだ。このエネルギー反応を！」
言われるがままボーンクラッシャーとロングハウルは『感知センサー』…通常の目視では捉えることのできない物を捉え、更にその数値を計ることのできる感覚器官のことだ。
本来そんなものはポケモンには存在しない筈だが、彼等はあった。
コレが意味するのは……いや、今は一先ず置いておこう。
「!!ッ　これは……」
「す、すげぇッス！　これほどの膨大なエネルギーが濃縮されているなんて！」
ロングハウル、ボーンクラッシャーの両名は只ただ驚くしかなかった。ただのガラクタに見えていたバッジが実は『凄まじく膨大なエネルギーを濃縮させたもの』だった、という事実に！
「そうだろう。なんと、たったこれ一個でアイアコンが５００年間も賄えるんだ！　そんな代物がこの２つを含めて８つもある……この意味が分かるな？」
スクラッパーの言葉にロングハウルとボーンクラッシャーは、何も言えず無言で頷く。
確かに利用価値は有りまくりだ。どの方向性に使おうが、このバッジを手に入れること自体は損なものでも無駄な事でもない。
自分達のボスがこれを何に利用するのかは未だ定かではないが……ともかく、自分達はこのカントー地方のジムバッジ８つを集めることを果たすべき使命を背負って任命された。

仕事はきっちり確実に。これが彼等『ビルドストラク師団』が掲げるチーム方針だ
。
自分達はそれに従い、任務を達成させるだけだ。
「さてと。それじゃあ、残りのバッジを手に入れる為の作戦を立てるぞ。あと…『地下臨時基地の増設の仕上げ』もな」
ビルドストラク師団のチームリーダー、スクラッパーの言葉に全員が同意と言う意味をもって頷いた。

第3話　始まり　カントー編　ｐａｒｔ３

ポケモンに限った事ではないが……何らかの対象を知る上で何も見ず聞かず、その対象の情報を得ようとするなどと言う事は、どう考え試行錯誤しようと土台無理な話だ。

他人から聞いた言葉にどれほど的確な正当性があろうとも……自分で見て知って、そして答えを得るというのは非常に大切な事。

俗に言えば、それは『観察』という言葉が一番当て嵌まる。

人間にしろポケモンにしろ。あるいは他の何らかの対象でも自分の目で見て聞いて、触ったり等。そういった事は基本中の基本であると同時に必須項目なのだ。

これよりポケモントレーナーとなるべく、オーキド博士から与えられた試験をクリアしようと努力・尽力している卵たちがその良い例だろう。

「キャタピーは糸を吐き、主にその場合、相手の身動きを封じる為ものだが……他にも糸の塊を飛ばして木の実を落す事もある…と」

早速グリーンは野生のポケモンである緑色にピンク色のＹ状の角が特徴的なむしタイプのポケモン『キャタピー』を観察対象とし、熱心にその特徴や行動を観察し記録していた。

対するブルーはネズミのようなポケモンの『コラッタ』、イエローは少々危険ながらも上手く隠れながら蜂の姿をしたポケモン『スピアー』など。それぞれで違うポケモンたちを観察対象とし、レポートを書き綴っていた。

そして一方、レッドはと言うと……。

「な、なんじゃこりゃあああああああああああああああああああああああッッッッ!!!!!」

森全体に響き渡らんばかりの大声を解き放っていた。

無論、観察対象のポケモンをまだ発見してもいないにも関わらず、このような奇行に奔っている最大の理由は、どういうわけか周囲の

木々が炎で焼かれたように真っ黒く焦げ切った墨状と化し、大体で１５ｍの大きさを誇るクレーターだった。更にその中心には、傷を負ったであろう一匹のリザードンが背を天に向けて倒れ込んでいた。
「って、おいおい大丈夫か！　待ってろ!!」
傷のダメージのせいか倒れ込んでいるリザードンを見て見ぬフリなど、人として出来るわけもないレッドはリザードンの下まで駆け寄り、その状態を確認した。
「ひっでー傷だな。ケンカか、もしくは人間に乱獲されかけたか……」
前者ならばともかく、後者はポケモン好きとして、人としても許せない所業だ。
この世界……ガイアスにはポケモンを大切に思う者もいれば、ポケモンを物として扱い商売品としか見ていない者、あるいは研究の為の実験材料などとしか認識していない者など。所謂『悪党』や『外道』と呼べる人間が少なからずいるのだ。
悲しいことだが、これも覆しようのない事実である為に仕方が無いのだ。
「まぁ、どっちにしろ今はこいつを手当てしないとな」
原因は一先ず置いておき、今は治療が先決だと判断したレッドはリザードンを自身で背負い、多少引き摺りながらも此処から離れようとしたその時。
「ほう…驚いたな。こんな所で出くわすとはな」
ふと、厳つい雰囲気の男の声が聞こえる。
同時に何者かの気配も感じたレッドは慌てて声と気配のした自身の背後を見る。
するとそこにいたのは…オレンジ色の毛並みに黒の虎柄模様が特徴的な犬に似た一匹のポケモンがいた。
そのポケモンをレッドは知っていた。
名前を『ウインディ』と言い、『警察ポケモン』の一種として、その自慢の嗅覚が捜査において役に立つポケモンである。
更に言えば、このカントー地方のグレンジムリーダーである男『カツラ』が所持する一匹でもある。野生下でも中々の実力高い、そんな

ポケモンが現れたのは吉か凶か……レッドがそれを正確に判断する前にウインディはその口から『言葉を発した』。
「人間の小僧。その二匹を置いていけ。そうすれば命までは取らない」
ウインディから発せられたのは、何と『男の声』……先程の声と違和感無く一致する事を鑑みればあの声の主は他ならぬ、このウインディだったのだろう。
「もう一度言う。これは最終警告だ。その二匹を置いていけ……命が惜しくば」
衝撃の事実に応答できなかったセキトへ向けて二度目であり、凄まじい殺気と共に最後の警告を発した。
もう何が何んだか分からない。
今のレッドの頭の内を代弁するのなら、これほど的確なものは他に無いだろう。だが……一つだけ分かり切った事があった。
「正直よぉ、いきなり喋るポケモンに出くわして、そんでもってピカチュウとリザードンを置いてけって言われても全然理解できねぇけど……こいつらを置いていくなんてゴメンだ。俺の勘がこう言ってる……お前にこいつ等を渡すと碌な事にならない、ってな！」
もう一度言うが、レッドには今の状況が一切分からない。
何故、このウインディが当然のように人の言葉を明確な意味をもって発しているのか。
何故、自分の相棒であるピカチュウと重傷を負っているこのリザードンに用があるのか。
全てが分からずじまいだが、しかしトレーナーとして、人として。得体の知れぬ相手の指示を易々聞く道理などない。
大人しく言う事聞いてピカチュウとリザードンの二匹に何かあったら、レッドは間違いなく自分を恨み後悔するだろう。
それがレッドと言う1人の少年だからだ。
「……これは、予想外の答えだな。勇敢なのか、それともただ単にのアホなのかは知らんが、ともかく貴様を『反逆罪』『無知罪』の名の下に処刑する！」

ウインディの処刑宣告と共に、その肉体が明確なまでに変化し始めた。
ウインディの両前足は後ろへと下がり両肩のショルダーパーツへ。胴体が上下四つに開いたかと思えば、そこから金属質の人型ボディが姿を現し、そして獣のそれを彷彿とさせるクロー部位が両腕に装着される。
両後足は腰部を囲むベルトとなり、ウインディの頭は胸部と化す。
そして。同時におぞましく鋭い異形の牙が規則正しく並び、同様に鋭利な形状をした左右対に四つの目らしきものを持つ凶悪的面構えのロボットのような顔の頭部が新たに出現。
ここに、ウインンディというポケモン形態から人型の金属生命体『トランスフォーマー』としての形となった戦士が顕現した。
「下等生物如きに教えても意味は無いかもしれんが……私の名は『バリケード』！　ディセプティコン監獄長兵だ！」
「ディ…ディセプティコン？」
「ピッカッ！」
名乗るウインディ。ディセプティコンという言葉に困惑する他無いレッド。そんな1人と1体の間を何かが飛び跳ねるように遮る。
それは『ピカ』という鳴声が特徴的な、他ならぬセキトの最初のパートナーポケモンであるピカチュウだった。
間に入って早々バリケードに向けて『でんきタイプ』の技である『でんきショック』を放った。
「ふん。ぬるいわッ！」
しかし意に介すことなく、蚊が刺した程度と言わんばかりに電気のエネルギー攻撃を大きく鋭利な鉤爪を備えたクローで容易く、まるで煙のように払い除けてしまった
。
「いい加減、本当の姿を晒したらどうだ？　オートボット」
またしても、聞き慣れない単語がレッドの耳に届く。
その言葉の意味を彼が考えるよりも早くピカチュウは次の行動に移る。

おそらく、あのバリケードに生半可なでんきタイプの技は通用しない。
ならば『通じるタイプの技』はどうか？
一か八だが、やらないよりはマシだ。
そう判断を下したピカチュウは本来ならば覚える事などない『みずタイプ』の技『みずマシンガン』を口から水鉄砲の応用で発射。
解き放たれた無数の水で構成された球体は、思わず目を剥くが如き凄まじい速度を伴い、風を切る。
そしてバリケードの顔・胴・右肩左腕へと的確に無駄なく命中していき、ついにはバリケードの膝を付かせてしまった。
「ぐウゥゥッッ！」
先程とは違い今度は明確なまでにダメージを負うバリケードにピカチュウは、内心自身の思惑が成功したことに対して安堵の息を零し、一気に畳み掛けようともう一度アクアマシンガンを撃とうとした。
だが、それは実行できなかった。
「フッ、間抜けなオートボットだな。もう勝ったつもりでいるのか！」
瞬間。宙を舞い技を放とうとしたピカチュウめがけ、何かが地面から飛び出して来た。
それは端的に表現するのなら、『普通よりも倍にデカいトラバサミ』というべきか。しかもそれだけでなく、そのトラバサミは実体を有さない炎で構成されており、にも関わらずピカチュウの身体を見事なまでにガチリと拘束。
そしてそのまま重力に従い落下すると同時に到達点である地面へと叩き付けられてしまった。
「ピッ、ピカァ……」
「ちょこまかとすばしっこいネズミでも、捕まってしまえばお終いだ」
トラバサミの拘束と熱による苦痛が拷問のようにジワジワとピカチュウの身を喰らっていく。その様子を変わらぬ冷酷な口調で言い放ったバリケードは、両腕に装備されたクローの鉤爪部位を相互打ち鳴らし合い、無骨な金属音が周囲に響き渡る。そして摩擦で少しばか

り熱の篭ったそれらをピカチュウへ向けた。
「さらばだ。オートボットのネズミよ」
「や　め　ろ　お　お　お　お　お　お!!　お　お　お　お　お　おーーーーーーーーーーーーーーーッッッッッッ!!!!」
今まさに止めを刺す気でいたバリケードの聴覚センサーに1人の少年の声が届いた。そして、行動に移すよりも早く声の主であるレッドがその顔面へと拳を叩き込む。
しかも。それだけに留まらず、レッドが殴った箇所は運悪くオプティックセンサー……すなわち、ポケモンや人間で言う所の視覚器官である『目』があるポイントだ。
彼は四つのオプティックセンサーを有するが、その内の二つがレッドに殴られた箇所だったのだ。
「ガァァァァァァッッッ!!　グゥッ……オオォォッ……き、貴様ァァ……」
殴られた顔の箇所を片手で覆い、残された上下二つのオプティックが赤く光る。まるで怒りを灯すかのように。
「そっちが先だろうか!　このイカレロボット野郎!!」
得体の知れない未知の相手に対し、そう啖呵を切って睨むレッド。その瞳に先程の怖気や困惑はなかった。
「いいだろう小僧。もはや助命申告も再審も無効だァッ!!」
少し時間を有したが何とか殴られた箇所のオプティックは正常な状態に戻り、特に問題は無い。だが自分よりも遥かに劣る、人間と言う下等生物に殴られたと言う事実が彼の心にそう簡単には消せない憤怒の炎を滾らせてしまった。
それを表すかのように彼の手から火が燃え出し、やがて帯のような炎となって曲がりくねりながらレッドとピカチュウめがけ向って来た
。しかも、ただ向って来るだけではない。
先端にあのトラバサミと同じものが形作られ、グバッと口を開いているのだ。まるで狙った獲物を食い千切らんとしているのかのように

……。
「さけろ、ピカチュウッ!!」
パートナーにそう命じ、自分も本当にギリギリの紙一重ではあったが身を横へと勢いをつけて倒すように回避。そのせいで地面に倒れてしまったレッドをチャンスとばかりにUターンして襲い掛かるトラバサミ。
「ピカチュウ、電気ショック!」
「ピィィ　～　～ッ　カ、　チュ!!　ウ　ウ　ウ　ウ　ウウウウウーーーーーーッッッッッッッ!!!!」
ピカチュウが自身の体内の電気を放出させて撃ち出した電気ショックとトラバサミがぶつかり合い、小規模の爆発が発生。
どうやら、威力は互角のようらしい。
「フン、生意気に私の『ほのおのトラバサミ』と互角とは。だが、私の戦闘能力はまだ半分も引き出されてはいない!」
まるで言葉に呼応するかのようにクローに付属された鉤爪が鋭利に輝きを増す。
しかも、それはそう見えたわけではなく『確かな意味』があった。
「アイアンクロー!」
バリケードが繰り出すのは、光り輝く鋼の爪で敵を切り裂く『はがねタイプ』の技『アイアンクロー』。
「よけろ、ピカチュウ!」
「ピカァッ!」
レッドの指示に従ったピカチュウは自身の俊敏性を生かし、迫り来る鋼の爪をジャンプで回避してバリケードの腕を踏み台に高く飛び上がった。
「そこから、体当たり!」
ノーマルタイプの技『体当たり』。
読んで字の如く、自身の身体を勢いつけて当てる技だ。程度としては低い攻撃だが、それでも思いっきり顔に命中した事で怯ませることができた。
「うぐッ!　小癪なネズミがァァッ!!」

益々怒りが湧き起こるバリケード。
自身が相手しているピカチュウが『自分と同じ存在』であり、『倒すべき敵』である事は分かり切っている。だが本当の姿にならず、あろうことか下等な種族である人間の言う通りに戦っている……高度な金属生命体としてのプライドが、より更に怒りの炎を燃焼させていた。
「ならば、この技をくれてやる……『インフェル・ブラスター』!!」
一つの技名を叫ぶと同時に両腕を真っ直ぐ前へと掲げ、その間から赤やオレンジ色彩の火花が散る。やがてそれは『火花』から『炎の塊』へと変貌。
そして、一気に射出された！
「電気ショックで相殺だ！」
「ピィイ～～ッカ、チュウウウウゥウゥウーーーーーーーーーー!!!!!!!!!!」
地面へ四肢を伸ばし、二足から四足へと立ち姿を変えたピカチュウは先程の物よりも力強く、体内の電気エネルギーを上昇させる。威力を高めに調整して電気ショックを放つつもりのようだ。この時、レッドと同じようにピカチュウもまたバリケードの攻撃を相殺せしめようと考えていた。
今、ピカチュウ自身が覚えている技の中で威力の高い技は『電気ショック』だ。タイプ的に効果がある『みずマシンガン』の方がいいのかもしれないが……おそらく単純なタイプ相性ではあの技を相殺する事は叶わない。
故に確率的には低いが……それでも、自身の技の中で威力が一番高い電気ショックがいいだろうピカチュウは踏んだ。
そんな相棒に答えるように同じく『電気ショック』の指示を出したレッド。しかし彼はピカチュウのような考えは特に無く、ほぼ咄嗟の本能的判断で『電気ショック』を選択したに過ぎない。
過程は違えど、同一の結果となった両者の判断。だが……それはあまりにも失策だったと言わざる得なかった。
インフェル・ブラスターの威力はレッドとピカチュウの予測を大き

く上回っていたのだ。その結果、電気ショックは容易く掻き消され、無残にもピカチュウの身体に直撃してしまう!!
「ビ、ビィィッカァァッッ!!!!!」
「ピカチュウッ!」
攻撃を受けて紙のように軽く宙へ舞い上がり、そのまま地面へと落ちかけたピカチュウ。だがその寸前、上手く両腕でキャッチしたレッドはピカチュウの姿を見て戦慄した。
体中に焦げ跡のような火傷を負い、苦しそうに顔を歪ませている。
見ただけで分かった。今のピカチュウは『ひんし状態』。
つまり……この尋常ならざるバトルは『負け』へと確定したのだ。
「そ、そんな……」
「ふん。よくも梃子摺らせてくれたな。だが、もはやこれまでだ」
ギラリと。殺気の篭った視線を投げ掛けるバリケードはその自慢のクローの鉤爪で、レッドとピカチュウを始末する腹積もりのようだ。
その証拠にゆっくりと重量を感じさせる足音を鳴らし、彼等との距離を詰めつつ片腕のクローを横へ掲げている。
殺される!
複雑に考える必要性など何処にも無く、故にレッドは容易くその答えに辿り着いた。
自分の命が危機に晒される時、人間の本能且つ心理的な行動は『発狂』か『逃走』の二択。仮にレッドがピカチュウを囮に逃げ遂せたとしても、それでレッドを『最悪』と罵り断じる事はできない。
まったくもって未知の存在を相手にポケモンバトル以外で戦う術を持たない人間に対し、どうにかして戦って勝ってみろ、などと言われても到底無理な話だ。
だからこそ、未だ理性を保っていられているレッドの取るべき行動は『動けないピカチュウを置いての逃走』しかない。
「……小僧。それは何の真似だ?」
しかし、前述のこれらはあくまで『大抵の場合』だ。
多いだけで全ての人間がそうなるとは限らない。

今、レッドがバリケードの目前で取った行動こそがソレだ。ダメージでひんし状態に陥ってしまったピカチュウをゆっくりと丁寧に地面に寝かせ、そしてまるでピカチュウを庇うかのように前へ立つ。
その瞳に諦めや絶望など一切無く、あるのは戦う意志…すなわち『闘志』のみが宿っていた。
「……俺は、逃げない。絶対に」
「ほう。この期に及んで、あくまで楯突くか。だが随分と震えているな？　それは恐怖からか？　それとも武者震いか？」
「……ああ。怖いさ。情けないけど、かなりビビっている……けどなァ！　それでもやらなきゃいけないんだよ!!　俺はポケモントレーナーになるんだ！　トレーナーが大切なポケモンを置いて逃げるような、そんな真似……俺の目指すポケモントレーナーじゃねぇんだよッ!!」
レッドはポケモンが大好きだ。
だからこそ、ポケモントレーナーへの道を歩んだ。
他の3人もそうだ。ポケモンに対する『情熱』と『好意』、そして『友でありたい』と願う気持ちに嘘偽りは無い。
ここで自身がピカチュウを見捨てて逃げると言う選択肢を取れば……それは3人に対しては元より、他ならぬ自分自身を裏切る破目になる。
それだけは、あってはならない。やってはいけない。レッドが絶対に守るべき自らの信念であるが故に。
「ご立派だな。しかし所詮、下等な生物の垂らす戯言だ」
冷淡に。無機質に。一切の感情を篭らずに語ったバリケードの言葉は、何処までも残酷な響きだった。
そして、僅か5秒。
スピードに遅れは無い。たった秒数と言う時間の中でレッドの身体はバリケードのクローの一撃によってバラバラに解体され、その命は容易く消える。ここまで聞けばもはやレッドの命運は終わったも同然だと思うかもしれない。運命は決して彼を見放す事は無かった。

≪レッド。レッド・フレイム≫
それは、唐突にレッドの脳内に響き渡るようにして聞こえた。
大人の女性のような、あるいは無垢な子供に近くも、母性的で慈愛に満ちた『声』だった。
それを聞いた瞬間。レッドはまるで自分の身体を現実に置き去り、意識だけが現実のそれとは全く異なる別の場所へ移動すると言う、とても奇妙な感覚に襲われた。
今までに無く……強いて言えばそれは『夢のような』と表現する方が近いのかもしれない。しかし意識は朦朧と霞がかったものではなく、想像を絶するほどにクリアと言っていい。
夢にしては、はっきりと知覚でき過ぎているのだ。
そんな感覚に戸惑うレッドに対し、その声は問いを投げ掛けた。
≪貴方には、選択する自由がある。故に選ぶ時です≫
「え、選ぶ？　何を…」
レッドの問いに対し、偽りも憚りようも無く声は言う。
≪貴方はここで死すべき運命ではない。故に私は貴方を生かしますが、それによって分岐する二つの道を選ぶ必要があります。
一つは、授かるべき力を得てその使命を担う道。
もう一つは、力を得ずにこの先多くの試練を乗り越えていく道。
どちらも貴方には必要なものであり、同時に捨てなければいけないものでもあります。力を得て進むか……力を捨て進むか。全ては貴方自身の意志が決めるのです≫
言葉の一つ一つを逃さず、頭の中に綺麗に収めていくレッドの心中にはもう、当初の困惑という情念は跡形も無く消え去っていた。
既に答えは見出していた。
「『力』をくれ！　このまま運良く生き残ったって、意味がねぇよ。仲間を助ける力を……あの訳のわかんねー位にヤバいのと戦う力を、俺に寄越してほしい!!」
必死の懇願は、他ならぬレッドの確固たる意志そのもの。
誰に言われるまでもなく、力を求めるその答えに声は微笑むように言った。

『ならば、授けましょう。しかし力とはいつ如何なる時と場でも責を伴います。選んだ以上…それを覚悟して下さい』
「おうよッ！」
≪……貴方は、本来ならば『力を授けられる事はなかった者』。完全なるイレギュラー。貴方と言う存在が何を齎すのか……私は見守っています≫
最後まで慈愛に満ちた声はそこで途絶え、レッドの意識は再び現実へと返還された
。

甲高い音が凄まじい衝撃と光と共に当たり一面に響き渡る。
まるで…何かの誕生を祝う獣の咆哮と称することもできれば、歯向かう者全てに滅びを約束する戦慄の歌声にも例えられるかもしれない。
いずれにしろ、それは『始まり』だった。
「!!ッ」
「こ、この光は……ッ!?」
バリケードの鉤爪は結局のところ、光とそこから解き放たれた衝撃波によってレッドを身を切り裂くこと叶わず、彼自身の身体を吹っ飛ばした。１５ｍほどの距離の幅を強制的に作らされたバリケードは、怒りを滾らせるよりもいっそ困惑の方が大きかった。
その光は計り知れなかった。
遠い昔、かつて見た『オールスパーク』が放っていた神聖なる光。
自分がいかに矮小な者かと実感させられる程ひしひしとその強大さが金属の肌に叩きつけられるかのような、尋常ならざる感覚。それとまったく同じものがあの光からも感じられるのだ。
そして何より一番の驚きは……そんな途方も無いエネルギーを秘

めた光をレッド・フレイムと言う、只1人の人間の少年がその左手の甲から発していると言う事実。
よく見てみれば、手の甲にはモンスターボールが炎を纏った様を象った不思議な紋章が刻まれており、やがて眩き光は純白のそれから炎を思わせる『赤』へと変わる。
その直後、レッドは叫ぶ。
「炎よ！　俺のピカチュウに力を!!」
それは決して考え出た言葉などではなく、ありえない位の直感という不確定要素に基づいて出された言葉だった。だがそれでも確かな意味を有していた。
灼熱を体現したかのような劫火が光を通じて顕現を果たし、さながらまるで光その物が火を噴いて燃焼している様に見えるだろう。だが
重要な部分はそこではなくその劫火はピカチュウめがけその身を包み込んでしまった。
傍から見て感じても尋常とは思えない熱をその身全てに受けてしまったピカチュウだが、不思議と無事そのものだった。
いや、むしろ瞬く間にバリケードによって与えられた傷が癒されていき、やがて炎が消え去った時には『ひんし状態』から『げんき状態』へとシフトチェンジを果たしていた。
「ピィッカァァッ！」
「ピカチュウ！」
危機的状況からの復活。これに誰よりも喜んだレッドは歓喜の声を上げる以外の術を知らず、理屈や他諸々など思考するエネルギーを子の場においてのみ捨て去り、ただ只パートナーであるトレーナーとしての喜びを噛み締めた。
「……そうか。そうだったのか」
しかし当然と言えば当然だが……それを許してくれる程に敵は甘くなど無い。
「よもや小僧が『プライムトレーナー』だったとはな。本当に運命の悪戯という不確定で非論理的な要素を感じせざる得ないな」

何処までも淡々と冷静で且つ、凄まじい怒りを底に隠しているかのような雰囲気と声音でバリケードは語る。更に『プライムトレーナー』という、またしても聞き慣れない言葉が出て来たがこの際レッドはそれを無視してバリケードに睨みを利かせる。
「ただの殺しが、『意味ある殺し』になった事を心から喜ぼう。無意味な殺しほど行使する価値無きものはないからな」
レッドにとってバリケードの言いたい事など一切分からないし、是が非でも分かりたいと願う気持ちなど一片たりとも存在しない。
そもそもバリケードという存在そのものが分かり難い存在である故、当然の理屈というものだろう。
だが……たった一つだけ理解できる事があった。
『こいつは自分とピカチュウの命を狙っている』、と言う明確な事実が存在することを。そう感じ思った直後レッドはチラ見する形でピカチュウへと視線を移した。
「ピカチュウ……お前も、本当はあんな風になれるんだろ？」
「!!ッ」
レッドの言葉にピカチュウは驚愕と罪悪感に染まった顔を作り出す。これを図星と受け取ったレッドだが決して責めるようには言わず、あくまでも自分の最初のパートナーたるピカチュウに信頼を感じさせる口調で言葉を続けた。
「このままじゃ、多分俺もお前も終わりだ。さっきみたいな奇跡っぽい事が二度も起きる可能性は低い……いや、間違いなく起きねーって何故だが知らねぇけどそう感じる。だから……お前の本気を見せてくれ。お前の本気の全力を引き出せる本当の姿ってやつをよ！」
レッドに嘘偽りなど微塵たりとも存在しない。故にその言葉は彼の心からの真実であり、ピカチュウもそれを悟った。
そして思った。自分はこの少年を騙していた。いくら『彼を守る為』と『正体がバレないようにする為』とは言え、このピカチュウとしての姿を用いて擬態する事でレッドの目を欺いてしまった。
だが結果的にレッドは自身の擬態を見破った。彼にしてみれば最初に選んだポケモンが『ポケモンの姿を借りた存在』に過ぎなかった

という事実は驚愕と共にどうしようもない悪質な裏切りも同然の筈だ。
だが彼は…レッドはそれを非難し責め立てる事はなく、本当の姿を見せてくれと言ってのけた。
それは責める為ではなく、この場の窮地を脱する為という合理的な理由と純粋な好奇心としての見たさから来るものだった。
故に語ったレッドの表情は実にこの場の空気に似合わず晴れやかな笑顔だ。それを見てピカチュウは決心がついた。
『今こそ本当の姿になって、自分の相棒を……レッドを守り抜く!』と。
「バンブルビー、トランスフォーム!!」
それは紛れも無い人の言葉。この場においての人間であるレッドではない声の発信源は……レッドのピカチュウからだ。
声を合図にピカチュウの姿が瞬く間に変化する。肉体が右から左の順に分かれ後方へと移動。背中の部位と化し、胴体が開いた中から機械的な部位が飛び出す。そこから胴体。両腕。両足へと変形。
最後にピカチュウの頭部が形成された胸部へと埋め込まれるように一体化を果たす。ただバリケードのそれとは違い、こちらは頭の天辺と耳のみを出す形なので、ピカチュウの顔は無い。
そして最後に…ロボットのそれと断言できるほどに温和そうで同時に勇猛さと凛々しさを感じさせる顔が出現。
バリケードと同じく節々や胴体の一部に有機金属で構成された筋肉繊維が垣間見せるバイオチックなデザイン。元のピカチュウと同じ黄の体色をメインとしたロボット戦士が今、ここに顕現を果たした。

第４話　始まり　カントー編　ｐａｒｔ４

黄色い身体を有するは、先程までピカチュウだった筈のロボットのような存在
『バンブルビー』。
それに相対しているのはウインディの姿を借りた同じくロボットに似た外見を有する『バリケード』。
一目見ただけで分かるほど、その肉体は金属で構成され、両者共に殺気と闘気を剥き出し牽制し合っていた。
無論、その異様な存在感と殺気、闘気の手前では矮小な人間の身であるレッドが入り込める余地など毛頭ない。
「貴様がオートボットなのは知っていたが、まさかプライマル直轄の精鋭部隊『エリートガード』のバンブルビーとは…しかも、ガキだったわけだ」
「子供だからって甘く見るなよ？　お前なんかすぐ機能停止にしてやるさ」
嘲笑を交えた風に吐き捨てたバリケードの言に対し、それを同じように嘲笑に満ちた台詞で叩き返す様はカッコ良くも見えれば、同時に若輩故の無謀にも取れる。
少なくとも、バリケードは後者として捉えていた。
「舐めるなよガキがァァ!!」
吼えるバリケードは、両手から火炎を生成し　、それをバンブルビーめがけ投げ付ける。
しかし、ただ投げ付けた訳ではなく、そのまま火炎は『ほのおのトラバサミ』と化す。
橙と紅蓮に染まった牙をこれでもかと見せつけるようにして口を開け、バンブルビーへ食らい付こうと迫る二つのトラバサミ。
一方、ほんの数秒後には無残なダメージを受ける運命にあるバンブルビーは、特に構え等なく、しかしその顔には諦めではない自信という一つの感情が隠そうともせず、堂々有り有りと晒していた。

「スタンピング・キック!!」
何かの技名らしきものを口にしつつ、自身の脚から引き出したジャンプ力を駆使する事で軽く身体を宙に浮かせるバンブルビー。
その後、重力の法則で地面へと落ちる際に両手を地に付け支えにし、下半身をありえない方向へと曲げるように回転させた。
ポケモンでいう『カポエラー』に似た体勢だが、あちらは一本角で身体を逆さに保っているに対し、バンブルビーの場合は両手で逆さ状態を成し得ており、また回転もカポエラーは身体ごと回るがバンブルビーは下半身のみ。
故にカポエラーとバンブルビーとでは逆さになると言う共通点があるだけで、実質的に大きく異なっていたわけだ。
ともかく。スタンピング・キックなる一風奇抜な回し蹴りは、バリケードのトラバサミを容易に掻き消すには十分だった。ほのおのトラバサミは、まるで夢から覚める際の幻影の如く、容易く消え失せてしまう。
だがそれだけで動揺を生み、そこに敵が入り込めるだけの隙を生産するほどバリケードは伊達に戦闘経験、戦場体験を積んではいない。
すぐさま攻撃方法をアイアンクローに切り替えて、鋭利に輝くクローラッシュを叩き込んでいく。その対応にバンブルビーは、上手く受け流すことができなかった。
防ぐことは辛うじてできるのだが、バリケードの繰り出すアイアンクロー単体の威力はバンブルビーにしてみれば非常に高いと言っていいだろう。
それこそ、まともに防ぎ続ければ装甲の耐久値を数分という短時間の内に超えてしまう程にだ。
そうなれば、彼は戦闘不能の状態に陥りその胸の中心に位置する生命の証『スパークコア』を抉り出されて、完全なる死の下に敗北することに成り果ててしまう。
そんな結末、望むところなんかじゃない。
心内でそう呟いたバンブルビーはピカチュウの姿を模した際に得た電気エネルギーを体内の電気袋から生成し、両手とその手首に集

約。
電気と言う名のガントレットで両手を覆ったバンブルビーはその雷撃を込めた拳でバリケードのアイアンクローとぶつかる！
「な、なにいいいいッッッ!!!!」
驚愕と苦痛を織り交ぜた絶叫を上げたのはバリケードの方だった。
ご自慢の鉤爪が雷撃の拳によって砕かれ、更に電気エネルギーはバリケードの全身を駆け巡り、筋肉繊維その物やその神経回路をズタズタに破壊して行く。
「グゥ、ガァァ、ウウゥッ!!?」
ここは退いた方が最良の選択。そう判断したバリケードはすぐさまその身体を変形させ、再びウインディの姿へ変わると脇目も振らず、敵であるバンブルビーに背を向ける形で後方へと去って行った。
「に、逃げたのか？」
「……みたいだね。とりあえずは安心だよ」
敵を深追いするのは得策ではないし、バンブルビー自身……と、彼の属する勢力の流儀に反する為、バンブルビーは敢えてバリケードを見逃した。
レッドはまだ状況の云々が正確には分からず、故に明確な判断を下す事ができない。
その心中は勇猛さに溢れた雰囲気に反し、かなりの動揺と混乱に陥っているのだ。
そんな訳でバンブルビーの行動に対し、特に異論はなかった。
「きゃあああああーーーーーーーーーーーーーーーーッッッッッッ!!!!!!」
窮地を脱し、ようやっと安息が訪れたかと思ったのも束の間。
それほど遠くない近くから聞こえる少女らしき者の悲鳴。
レッドには、この声にはよく聞き覚えがあった。
「この声……ブルー!!」
「あっ！　待つんだレッド!!」
その声は彼の幼馴染であるブルーのものと、完全に一致していたのだ。

すぐさまレッドは悲鳴の聞こえた方向へと走り出した。そんな彼にバンブルビーは制止の声をかけるがそれをレッドは一切聞かず、当然足を止める事などはなかった。
「あ～もうッ!!」
少し苛立ちを交えたような声を上げ、バンブルビーはロボットモードからポケモンモードへと切り替える。ピカチュウの姿となってそのままレッドの後を追う形となった。

ブルーの心は混乱と恐怖に見舞われていた。
何故なら、突如として自分に襲いかかった蜂のような姿をした『むしタイプ』のポケモンスピアーの存在がその最たる原因だ。
別に彼女は野生ポケモンの襲撃を予想していなかったわけではない。ポケモントレーナーとなって様々な道を行くのであれば、突然の野生ポケモンによる襲撃など当たり前な事だからだ。
そうなった場合におけるポケモントレーナーの選択肢は三つ。
自分のポケモンを使い、野生ポケモンを退かせるか。
または何かしらの手段で逃げるか。
ある程度弱らせ、モンスターボールを用いてゲットする。
これらが通常のポケモントレーナーの取るべき行動だ。
ブルーの場合は逃走という選択肢を取った。
理由は、今自分を標的と定め追っているスピアーをポケモンとして見ていいのか。
判断しかねていたからだ。
「ブゥゥーーーン!! 俺ちゃんから逃げられると思うなよ、ブン!!」
喋るのだ。その口で、しっかりと意味を孕んだよく分かる人語で。
当然の事だが人の言葉を口にするポケモンなぞブルーは知らない。
オーキド博士からポケモンの知識を学ぶ以前に常識としてポケモンが人の言葉を話せないのは、当たり前のように知り得ている。
ポケモンは、ポケモンだ。
人間ではないし、別種の生き物である人間の言葉を口にする事はで

きないのだ。
　これはポケモンという種のスペックによるもの故に覆しようもない事実……しかし、何事も例外は存在する。
　ある様々な場所に繋げる不思議なリングを持つ伝説のポケモンはある人間を通じて言語を学び、人との会話を成した。
　また、アーシア島と呼ばれる地には誰に学ぶ訳でもなく、人の言葉を確固とした意味を伴った上で使えるヤドキングなど。
　例外は、極少数ながら存在しているものなのだ。
　しかし、現状ではこのスピアーがその極少数に属するものなのか。それを正確に断定付ける判断材料はなく、悠長に調べさせてくれるほどスピアーも友好的ではない。
「ブーン、ブンブン!!　すばっしこい下等生物め！　これでも食らえ!!」
　ブンブンと変わった口調で唸り叫ぶスピアーは、両手のニードルから無数の針を散弾のように発射。
　どくばり、と言う『どくタイプ』の技である。
「きゃああッッ!!」
　射ち放たれた無数の毒の針は、ブルーの足下に刺さるもブルーの足その物を刺す事は一本たりともなかった。
　どうやら運良く回避できたようだ。
「フシギダネ、『つるのむち』!!」
「ヒトカゲ、『ひのこ』だ～!!」
　しかも運の良さはそれだけではない。
　ブルーのよく知る二人の友の声がフシギダネとヒトカゲに技の指示を告げた。
　まさしく蔓を鞭のように振るう『くさタイプ』の技、つるのむちがスピアーの顔面へ直撃しその動きを大いに鈍く狂わす。続けて全身を火の粉が襲いかかり、むしタイプであるスピアーにしてみればこれは効果覿面…の筈だった。
「ブーンブンブン、ブゥゥーーーーンッッ!!!!!!　あんまり俺ちゃんを怒らせるなよガキどもォォォーーーーーー!!!!!!」

ダメージがない訳ではない。
だが、それがあまりにも少なかったのだ。
「スピアーが、喋っただと……ッ!!」
「ど、ど～なってんのこれ～!!」
ブルーを庇う形で前へ出た二人…フシギダネのトレーナーであるグリーンとヒトカゲのトレーナーイエローは、目の前のスピアーに対しブルーと同じく驚きの二文字がその顔に浮き出ていた。
「い、イエロー！　グリーン!!」
「大丈夫？　悲鳴が聞こえたから急いで駆けつけて来たけど…」
「こうして見ても信じられないな。ポケモンである筈のスピアーが人の言葉を話すなんて!!」
「おまけになんか～、弱点のほのおタイプの技が当たった筈なのにダメージが少なそう……」
やはりと言えば当たり前の事だがブルーがそうであったようにグリーン、イエローの二人もその反応は驚愕のものと同時に困惑、動揺などの言葉を含むそれだ。
通常のポケモンバトルの基礎におけるタイプ技による弱点を突いた、この戦法が通用しない事がそのキッカケだった。
ポケモンにはタイプによる相性と言うものが必ず存在する。
御三家、三すくみ、などと称される三つのタイプ『炎』、『水』、『草』のこれらを例に上げよう。
炎タイプは水タイプに弱く、草タイプに強い。
水タイプは炎タイプに強いが、草タイプには弱い。
草タイプは水タイプに強く、しかし炎タイプに弱い等。
このように、ポケモンのタイプには相性がどのタイプにも必ずあり、これを無視する事はできない。
だが。ブルーたちの目の前にいるこのスピアーに至っては、その無視できない筈のタイプの法則を無視していると言っても間違いではなかった。
「ワスピネーター、トランスフォーム!!」
そんなブルーたちの心中なぞスピアーには関係ない。彼は自らの

名と、自身の身体を本来の姿へと変形させるキーボイスを叫んだ。
そのあとに起きた変形という現象は、瞬く間だった。
両腕のニードールが三等分へと割れ、その間から紫のラインが奔る機械的な部位が露わとなり、頭部は二つに分かれて両肩と化す。
そして金属で出来た両腕が胴体の左右側面から出現し、黄と黒の縞模様が映える尻部がパズルのように割れ分離し、そこから両腕と同じ金属で構成されているであろう両足が射出。そのまま尻部は両足と一体化し、パーツの一部となってしまった。
最後に凶悪さを醸し出す昆虫的なクリーチャーのような顔の頭部が現れ、変形は無事完了せしめた。
「ディセプティコン偵察兵、ワスピネーター！　お前らを地獄に送ってやるブン！」

第5話　始まり　カントー編　ｐａｒｔ5

ディセプティコン航空偵察兵『ワスピネーター』。
つい先程までスピアーだった存在は、有機的な要素を持つロボットへと変形を遂げ3人の前へ立ちはだかり、そう宣言する。
「喰らえブゥゥーーーンッッ!!」
両腕のニードルから『毒針』の技を放つ。
真っ直ぐ3人めがけ降り注ぐ猛毒を秘めた針に対し、グリーンがすかさずフシギダネに指示を出す。
「フシギダネ、葉っぱカッター!!」
フシギダネの蕾から射出された無数の葉は、それ一個一個が鋭利な凶器その物。
そこに投擲というスピードが加われば強力な一撃が期待できる技だろう。だが今繰り出した目的はスピアー……ワスピネーター本人への攻撃ではなく、彼の放った毒針を打ち砕く事だ。
結果は上出来。葉の刃は見事に毒針を打ち砕き、しかもスピードを保ったままワスピネーターへと迫る。
「『ミサイル針』!!」
ワスピネーターが技名を叫ぶ。
今度は猛毒を秘めた針ではなく、爆発力を持った針を発射する技『ミサイル針』を繰り出す。針は性能通り爆破。
植物である葉は無残に炭となり、更に宙を舞うミクロの塵と化した。
「ブブッ、残念ブゥゥン?」
羽音を織り交ぜたような声で嘲笑を漏らすワスピネーター。
「これで仕留めようとは思ってない。本番はここからだ」
対し、グリーンは不敵に笑う。
自分よりも遥かに劣り、戦闘もポケモンという生物の力を借りなければならない下等生物。そんな存在に生意気な態度を取られてスルーできるほど、ワスピネーターは寛容とは無縁だ。

「いい気になりやがって、後悔しろブン!!
」
「!! フシギダネ、『丸くなる』だ!」
続けてミサイル針を発射するワスピネーター。
しかし今度の物は緑色の光を纏わせていた為、何かあると踏んだグリーンはフシギダネに防御力をアップさせる『丸くなる』を使用させる
。
そして、ミサイル針がフシギダネに当たったことでグリーンの予想は的中した。
威力が上がっている。
まず一目見て感じたのがそれだった。
「ブゥゥン……いいことを教えてやる。俺ちゃんの針には色々な効果があるんだよ。ここまではＯＫブーン？　今のは爆破力を増加させる、謂わば『火薬』に近い発光物質が含まれた針なんだよ」
ワスピネーターの針は、ただの針ではなく、彼の体内によって生成される特殊なもの。
体内にある針の製造器官で生み出され、更に様々な物質・エネルギーを保管する内臓部品の保管物資を織り交ぜる事で多種多様という効果の針を作り出せる。
例えば、上記の発光針のように。
例えば、レーダーやセンサーには映らない程の性能を誇るステルス針。
例えば、敵の全てを残す事なく燃やし尽くす高温燃焼針。
例えば、あらゆる金属生命体の生体金属を錆へと変質させてしまうコズミックルストと言う病原菌が付与された錆針。
他にも色々あり、どれもが厄介さを秘めているのだ。
「チッ、それで威力を強めたって事か」
「ダ、ダネフ……」
舌打ちしつつ、グリーンはフシギダネへと視線を向ける。
フシギダネの受けたダメージは瀕死のギリギリ…それより数歩前

といった感じだが、これ以上のダメージは瀕死状態に陥る『戦闘不能』に繋がりかねない。
「ブルー、イエロー！　フシギダネを回復させる。それまで頼んだ！」
「うん！／はい！」
フシギダネを下がらせ、ブルーとイエローに後を任せるグリーンは背中のバッグから傷薬を取り出してフシギダネの治療と体力回復にかかる。
「なんだ？　あの種生物の次はお前らか？
まぁ、何であれ……ぶっ刺しブゥゥンッ!!
」
選手交代したとて、ワスピネーターの態度は全くもって変わらず。
その嘲笑気味の顔には、相手をいかにして刺して命を奪い取るかと言う狂気が沸々と滲み出ている。
「ヒトカゲ、火の粉!!」
「ゼニガメ、水鉄砲です!!」
流水の直線と粉のように小さい火の玉の数々。
それらはポケモンであるゼニガメとヒトカゲの技だが、ただ技を放ったわけではない。
ヒトカゲとゼニガメには、イエローとブルーが試験の始まる前に攻撃力を上げる『パワーパウダー』という道具を予め使用しており、これにより両者の攻撃は通常より高めの威力を有している。
試験前や試験中での道具使用は禁止ではない為、事前に準備していた
ものだ。
「ぐぶぅぅッッ!!　……チィッ、少しはやるようだな」
火と水の同時攻撃を食らいつつも、倒れる事なく態勢を維持して見せるワスピネーター。
その姿から大したダメージは与えていないと言う事実が粘り気を帯び
、まるでブルーとイエローに絡み付くように伝播する。
とても嫌な感覚だ。

しかしこれは認めなければいけない。
トレーナーであれば、相手の力量を測る事も必要なことだからだ。
「さて、そろそろ…ん？　この反応は……」
ふとワスピネーターのセンサーがある反応を捉え、それが自分と同じ存在であるトランスフォーマーだと分かった途端、その顔を忌々しいとばかりに歪ませる。
「(チッ、よりによってオートボットかよ。
しゃーね。ここは一旦引いとくか)」
自分はあくまでも戦いに来たのではなく、偵察のついでに狩りをしに来ただけだ。
弱いながらも中々に歯応えがありそうなポケモントレーナーと言う獲物。
まだまだ子供に過ぎないが、それでも遊戯的な狩りの対象として見れば文句はなかった。
しかし、オートボットに関しては違う。
オートボットは自身の命をかけて戦うに相応しい因縁の宿敵。遊戯的な狩猟対象と見て軽んじてはならない戦士だ。
故にワスピネーターは撤退を選んだ。
相応しい時と戦場にて、そのスパークをかけて生か死かを決する闘争を演じるその日まで……。
「ブゥゥン！　ここは一旦、退くべし～～!!」
先程の狂気と殺意を孕んだ声とは到底思えない間の抜けた声と共に、スピアーの姿へ戻るワスピネーターは、翅を羽ばたかせるとその場から一気に離脱。
そのまま飛び去る形で消えていった。
「い、行ったのですか？」
「らしいな。理由は分からんが」
脅威が消えた事への安堵からふとそんな言葉を零すブルーにグリーンが、回復したフシギダネと共に歩み寄り、彼女の疑問に答える。
「ねぇ、本当にアレ、スピアーだったのかな？」
「……いや、違う。断言してもいい。アレは……スピアーの姿を模倣

したロボットだ」
「確かに。でもロボットだとしたら、一体誰が作ったものなんでしょうか？　それに私を襲うなんて……」
アレは、間違いなくロボットというカテゴリーに当て嵌めるべき存在
だろう。
金属的ボディとメカニックなデザイン。
それらが断定していると言ってもいいのだが、ロボットと言うのには明確過ぎる自我的意思があり、変身する前は本物のスピアーと思い勘違いしてしまった程に生物感を彷彿とさせる有機的要素があったのも事実。
普通のロボットなら……そんなものは絶対にない筈だ。
「バンブルビー、トランスフォーム!!」
謎と疑念が沸き起こる空気に一差し入れるが如く。
一つの声と共に一匹のピカチュウが出て来たかと思えば、目の前でロボットへと変わり果ててしまった。
先程のスピアーと同じ事象、存在。
それを瞬時に反射的に認識した3人は構えを取り、パートナーたるポケモン達もいつでも攻撃出来るように態勢を取る。
「ちょ、ちょっと待って!!　僕は君達の味方だよ！」
「みんな、やめろ！　こいつは良い奴なんだよ
!!」
しかし、ピカチュウだった者……バンブルビーは腕を前に両手を左右に振り、敵意はないと慌てて叫ぶ。
更にバンブルビーの後方からレッドが現れ、3人に危険はないと説得して来た。
「レッド！　これはどう言う事なんだ？　アイツと知り合いなのか？」
「知り合いも何も、俺が最初に選んだポケモンなんだよ」
グリーンの問いに何も曲げず、嘘もつかずに即答するレッドの言葉。

正直な所、はっきり言ってしまえば『答えになっていない』ものだったが。

「……ＯＫ。じっくりゆっくり話を聞こう。色々と聞きたいこともあるし、お互いに情報共有だ」

思わずレッドに物申したくなるグリーンだが、そんなことをしでかしては埒が明かない。

故に一旦怒気を鎮め、冷静さを取り戻した上で情報を交換し合い現状の確認を取ると言う意見を出した。

レッドは何ら反抗する事なくその提案に従い、イエローもブルーも同調。

最後にバンブルビーの承諾も得る形で決まり一同はオーキド博士が待っているであろうスタート地点を目指し、森を抜ける事となった。

ちなみに、リザードンはレッドたち＋ポケモンたちと言う総出で運ぶ

形で回収したので問題ない。

ただ、研究所までそれなりに距離はあった為、結構大変だったが

……。

……。

第6話　始まり　カントー編　ｐａｒｔ6

鬱蒼と生い茂る森の中を風の如く疾走する一つの影。
それは一匹のウインディだ。更にそのウインディと並走するようにして飛ぶスピアー……いや、『ワスピネーター』はウインディへと声をかける。
「ブゥゥン。お前そのダメージ……さては、オートボットにやられたな？」
「うるさい！　……あのエリートガードの小僧、いずれ頭を噛み砕いてやる」
ウインディこと『バリケード』は、怒り心頭と言わんばかりに殺気立ち改めてバンブルビーを仕留めてやると息巻き決意を固める。
そんな彼にワスピネーターは特に興味こそはなかったが、『エリートガード』という言葉に興味を示した。
「ブ～ン、もしかして～『エリートガード』と戦ったのか？」
「ああ。名はバンブルビー。知っているだろ？」
「もっちろ～ん！　アレだろ？　歴代最年少でなったって言う、オートボットの逸材君」
「そうだな。戦闘センスとそれに関係する技量は認めざる得ない。だが、だとしても経験が足りん。あの時はガキだと油断したが……次はこうはいかん」
ワスピネーターとバリケードがそんな会話を繰り広げている内に両者は目的地である洞窟の前へ辿り着いた。
森の中に聳える崖にぽっかりと空いた穴の中は極めて漆黒に包まれ、入口手前はともかくその先は懐中電灯などの光源が無ければ把握すること叶わない闇が
「ディセプティコン、バリケード。貴方様の伝令により与えられた偵察任務から、只今戻りました」

「同じく、ワスピネーターも」
普段はお気楽な口調の筈のワスピネーターが洞窟の前で、ウインディ姿のバリケードと共に頭を下げ、畏った態度を見せると言うのは見る者によっては驚きの光景かもしれない。
しかし『洞窟の中にいる者』は彼等ディセプティコンにとって、重要人物であると同時に敬うべき存在なのだ。
「バリケード、ワスピネーター。急な伝令ですまなかったな……で、結果はどうだ？」
「貴方様が懸念した通り、オートボットでした。しかも、エリートガードが2体も」
「ほお……で、そいつらは仕留めたのか？」
「それは……」
予想できた問いだったが、ディセプティコンに名を馳せるバリケードは素直に2体共取り逃がしたなどと間抜け過ぎる報告はゴメンだ。
プライムトレーナーと言うイレギュラーがあったとは言え、エリートガード小僧一人に敗退を余儀なくされたなど、恥以外の何者でもない。
しかし、無言や虚言など。眼前の人物に何ら意味を成さないことをバリケードは知っている。
だからこそ、正直に事の顛末を報告した。
「……分かった。まぁ、プライムトレーナーの存在もあった以上、任務失敗の責は問わん。それよりも気になるのはプライムトレーナーの子供の方だ」
厳格なる声の主が興味を示したように呟いたのは、レッドの事だった。
「プライムトレーナーの証『プライマックスエンブレム』が手の甲にあった筈。何が刻まれていた？」
「『炎』です。間違いありません」
バリケードの言葉に洞窟から忌々しさをこれでもか、と孕ませたよ

うな獣の如き唸り声が響き渡る。
　それを聞くだけでバリケードは身体を巡るエネルギーや体液全てが凍りつきそうになる錯覚を感じ、隣にワスピネーターに至っては、今にも気絶しそうな程に震えている。
「よりによって、炎のプライムトレーナーが早期に覚醒したか。炎は１８人いるプライムトレーナーの中でも統率力を発揮し他を導く者……まだ子供とて生かしてはおけん」
　声の主はそう言いながら、一歩。一歩。
　また一歩とゆっくり地鳴らしのような重低音を旋律させバリケードとワスピネーターたちへ近づいて来た。
　やがて、洞窟の中からその全容が明らかとなった。
　身体の全体を占める灰色を溶け込ませた様な銀色。
　ヘルム状の頭部にある顔は悪鬼羅刹の如くと言わんばかりに凶悪的なもので、何か得体の知れない憎悪や怨念…そう表現しかできない負の情念が渦巻いている。
　刺々しいと例えるに相応しいエッジの多いフォルムは、何処か一風変わった騎士のようにも見えなくない。
　右腕には外見と同様にエッジが目立つフォルムの砲身『融合カノン』が装備されており、これこそが彼にとっての主力武器だ。
「炎のプライムトレーナーを殺せ。子供であっても、だ。プライムトレーナーは我等ディセプティコンの野望を妨げる存在。引き入れる事ができればそれに越した事はないが、敵であるオートボットに付くのなら……致し方あるまい」
　冷酷に。厳格に。
　そう告げた存在……『破壊大帝メガトロン』に対し、バリケードとワスピネーターは了解の意を答え、すぐさま行動に移す事となった。

「で、何から説明すればいいのかな？　も、
　もちろん全部答えるけどさ、何処からって言うのも大事だと思うん

だ」
「……じゃあ、質問その一。お前は、いや、
お前らは一体何なんだ？」
オーキド研究所では、ふざけなど一切通用しないほどの重圧とした空気で支配されていた。
原因は他でもない、ピカチュウの姿からロボットへと瞬く間に変身することのできるバンブルビー本人だ。ちなみに今はピカチュウの姿になっている。
彼が何者なのか、それを知る者は本人を除いてこの場にはいない。
つまり、レッド達からすれば、全てが未知の存在ということになる。
だからこその、最初の質問が存在の詳細というわけだ。
「じゃあ、まずは僕という存在について。
僕はこの星から遠く離れた惑星サイバトロンから来たんだ。僕の種族……トランスフォーマーは、別名サイバトロニアンとも言ってご覧の通り機械に似た構造を持った金属生命体なんだ。えっと、ここまではいいかな？」
最初の説明だけでも到底ありえない話なのは嫌でもよく分かるだが、それを話している存在が既に証明となってしまっているのだから否定もできない。
「僕らは、サイバトロニアンという原種から更に二つの種に分かれていた。平和的で温和な性格のマクシマルズと、攻撃的で凶暴な性格のプレダコンにね。二つの種はその違いから常に争っていたんだ。戦って、戦って、とにかく戦い続けた。一つの戦いが終わっても新しい戦いが始まって、その繰り返しだよ」
そういった部分は人間と然程変わらないのだとレッド達は内心思った。
実際、過去の歴史を見るに人間同士の戦争や紛争など多くあった。
中にはポケモンさえ戦争の道具にするような凄惨な戦いもあった程だ。
世界は変わろうとも、そういった生物としての闘争は変わらないのかもしれない。

「そんな延々と続く戦いの世界に嫌気が差して、宇宙へ旅立つサイバトロニアンも少なくなかったよ。そんなある日、一つの紛争が起きた。
サイバトロンの第一首都『アイアコン』から始まった。その紛争はマクシマルズに奴隷化されたプレダコンが起こしたもので、当初はすぐ片がつくものだと誰もが思ってた。何せアイアコンの防衛軍はサイバトロンの中でも別格級。下手に仕掛ければ返り討ちがオチだったからね」
と、ここでレッドが疑問を孕んだ顔で質問した。
「待ってくれ。その、プレダコンって連中を奴隷にしてのか？　長年の敵ってやつなんだろ？」
「プレダコンの中には、過去僕たちマクシマルズに捕虜として捕らえられた、あるいは捕虜を祖とする奴隷民族がいたんだ」
「で、そいつらを散々こき使って反逆された……ってオチか？」
バンブルビーの言葉にグリーンが嫌悪を滲ませて割って入る。
グリーンは過去、悪質なトレーナー集団の奴隷と化してしまったポケモンを見たことがある。扱いは最悪で、ポケモンに対しての目は『道具』としか見定めていなかった。
そのトレーナー集団は、今では警察によって御用となっているが……悪質なポケモントレーナーは、彼らだけでなく今も確かに存在しているのだ。
だからこそ、怨敵とは言え相手を隷属化する
マクシマルズのやり方に関しては内心否定的だった。
「……うん。言い訳のしようもなくその通りだよ。奴隷民族はある者の手で解放されたんだ。そいつはサイバトロン防衛軍の司令官にまで登り詰めた男。
名は『メガトロン』。破壊大帝メガトロン」
二度、その名を繰り返すバンブルビーはその名の主に対する恐怖感があるかのように念押している風にも捉えられる。
いや、実際のところ恐怖しているのだ。

破壊大帝メガトロンを前にして、今まで生き残ってこれたのは現オートボット総司令官の『彼』と、その近衛部隊であるエリートガードたちのみ。
他は挑みかかったものの、その悉くが死に絶えた。
正直な所、エリートガードも彼がいなければ全滅も有り得ただろう。
他でもないエリートガードの一員であるバンブルビーが躊躇なく、そう断言せしめるのだからその強さが窺い知れる。
「おい、みんな終わったぞ」
と、ここでドアを開けて入って来たのはオーキド研究所の所長にしてポケモン学界の権威オーキド博士だった。
言わずもだが、オーキド博士は既にバンブルビーに関しての説明はレッドたちから受けている。
「あのリザードンの具合は？」
「それがの……色々精密検査をして分かったんじゃが……ありゃロボット、いや、そちらさんと同じ存在のようじゃな」
レッドたちに頼まれて精密検査と治療をしていたオーキド博士だが、どうにもあのリザードンはポケモンではなかったらしい。
ポケモンに関して言えば専門分野だが、機械は全くの専門外。
つまり、お手上げの状態なのだ。
「僕と同じ?!　でも、もしそうなら信号で分かるはずなんだけど……」
「もかして、どっか壊れてんじゃないのか？　とにかくあのリザードンが機械で出来てるんだったら、俺の出番だな」
そう言ってニカッと笑い、自信満々とばかりに袖を捲り上げるレッドだがそれを止めたのはグリーンだった。
「ちょっと待て。お前まさか、直す気なのか？　宇宙から来たロボットを？　」
「まぁな。こう見ても機械は得意なんだよ」
「おいおい、待てって！　そこらのプラモデルとは違うんだぞ！　直すなんて無謀だ」
「やってみないと分からないだろう？　それに俺はあいつを助けるっ

て誓ったんだ。あいつ自身じゃなくて、俺個人だけどそうと決めた以上はやる。俺の性格、知ってるだろ？」
これだ。昔からレッドはこういった性格なのだと今更ながらグリーンは思った。
決めたことに振り返らず一直線。
決して曲げず、最後まで諦めない。
天へ真っ直ぐと伸びる情熱の炎と言えるのが
レッドという少年なのだ。
「……分かった、分かったよ。好きにしろ」
「へへっ、ありがとうな」
「礼なんか言うな気持ち悪い」
「いや、お前のナルシストぶりの方がキモい
だろ」
そんな会話を交わしてレッドはリザードンがいる部屋へ向かおうとするが、ドアを開ける前にバンブルビーを呼びつけた。
「お前も直してやる、来いよ」
「う、うん」
レッドに従い彼の側へ寄るバンブルビー。
部屋を出て行く一人と一匹を見てグリーンとブルー、そしてイエローとオーキド博士は溜息を吐いた。恐ろしくばっちりなタイミングで。
「厄介なことになったな。これは」
「本当だね～。でも、宇宙人っていたんだ」
「それもポケモンに擬態できる変形能力を持った……ロボットですね」
「ワシもかれこれ長生きしているが、う～ん……何とも言えんのう。その、え～と、なんじゃったかな？」
「トランスフォーマー」
「そうそう、それじゃ」
正しく名前を言えない、というか記憶できていないオーキド博士に対しグリーンが答えた

。
「しかし、そのトランスフォーマーとやらは一体何なんじゃ。ポケモンへ違和感を与えずに変形できるロボットなんぞ聞いたこともない」
「俺たちも知ったばかりだけど、教えるよ」
正しくトランスフォーマーに関しての知識がないオーキド博士に付け焼き刃だが、先ほどバンブルビーに教わった情報を伝えるグリーン。
それを聞いて行く内にオーキド博士は不思議な懐かしさを内心密かに感じていた……。